

魔女の厨

(低き竈の、火を焚けるが上に、一つの大鍋掛けられあり。これより立ちのぼる蒸気の中に、種々の形相現ず。牝の尾長猿、鍋の傍に蹲(うずくま)り、泡を掬い取りつつ煮えこぼれぬように気を配る。牝の尾長猿その子猿どもと共にその傍に蹲りて暖をとり居る。四壁と天井とは極めて異様な魔女の家具にて飾られあり。)

ファウストとメフィストーフェレス。

ファウスト

俺にはこの狂気じみた魔法沙汰は気に喰わぬ。
このごった返す気違い騒ぎの中で
俺の体がなおると君は受け合うのか？
俺は一人の老婆(ばばあ)の忠言を請わなければならんのか？
そうしてこういう腐料理が
三十年を俺の体から消し去ることが出来るのか？
君がこれ以上のことを知らないんなら、俺はみじめだ！
もう希望は消え失せてしまった。
自然も一人の傑出した霊も、これまでに
何か霊薬を発見しはしなかったのか？

メフィストーフェレス

我が友よ、貴君は再び聡明な物言いをしますね！
貴君を若返らせるには自然的な方法もあります。
けれどもそれは別な本に書いてあるもので、
その不思議な一章なのです。

ファウスト

俺はそれが知りたい。

メフィストーフェレス

宜しい！金もいらず、
医者も魔法もいらずに獲られる一つの方は----
すぐさま野良へお出掛けなさい、
糶(くさぎ)いたり反(かえ)したりを御始めなさい、
貴君の体をも心をも、極限られた
範囲のうちで生かして行くようになさい、
天然自然の食物で身を養いなさい、
家畜と一緒に家畜になって生き、自分の収入をする畑は
自分で施肥(せひ)をすることを身分違いだとは思いなさんな。
これが嘘詐(うそいつわ)りのない絶好の方(ほう)で、
これなら八十までも貴君を若くして置きます！

ファウスト

俺はそれに慣れて居らぬ、俺はそれに身を馴らし得ぬ、
犁(すき)を手にとるところまでは。
狭っ苦しい生活は全く俺の柄(がら)にない。

メフィストーフェレス

すると矢張り魔女の方が柄(がら)ですな。

ファウスト

人もあろうに婆(ばばあ)とはなあ！

君は自分でその飲薬を醸造し得ないのか？

メフィストーフェレス

それは結構過ぎる暇潰しですて！
その暇に魔の橋を千(せん)架けた方がいいですな。
技術と学問だけではなくて、
この仕事には辛抱がなけりゃあ駄目です。
気のゆったりした奴が長年それに取り掛かる、
時だけが微妙な醗酵を力強くするのはです。
それに、そのために必要な一切万事が
全く奇天烈(きてれつ)なものですからなあ！
勿論彼奴(あいつ)に方を授けたのは悪魔です、
併し悪魔が拵えるわけには行かんのです

(獣どもを見て)。

御覧なさい、何という可哀い奴等でしょう！
あれが女中です！あれが僕(しもべ)です！

(獣どもに)。

おかみさんは留守と見えるね？

獣ども

およばれに。
うちを明けて
煙突(けむだし)から抜けて！

メフィストーフェレス

いつもどの位の間ぶらついて来るのだい？

獣ども

私どもが手足をあぶっている間さ。

メフィストーフェレス(ファウストに)

この繊細な獣どもをどう思いますか？

ファウスト

俺が嘗て見たこともないほど下らないと！

メフィストーフェレス

そうでもないさ、さっきのような問答こそ
私が一等好きです問答なのですよ。

(獣どもに)

詛われた人形ども、きかしてくれ、
お前達はその粥の中で掻き廻しているのは何だい？

獣ども

私どもは薄くのばした施行(せぎょう)粥を煮ているのさ。

メフィストーフェレス

そんならお前達には大した人気があるだろうな。

牡

(近づき来りてメフィストーフェレスに媚(こ)ぶ)。
おお、すぐに賽ころを振って、
わたしを金持ちにして

儲けさせてくだんせ！
ほんにしけ続きだよ、
金さえありゃあ
わしも智慧がつくべいさ。

メフィストーフエレス
猿もどんなに仕合わせと思うだろうなあ、
自分も富籤を買えるようだったら！

(此の間子猿等大いなる珠と戯れいたるが、それを転がし出す)。

牡
これが世界だ。
昇ったり沈んだり、
しょっちゅう廻る。
硝子の様(よ)に響く----
すぐ毀れるぞ！
中味はからだ。
此処はきらめく、
こちらはもっと。
俺は生きとる！
可哀い坊や、
離れていなよ！
死ななきゃならぬぞ！
あれは土焼、
碎片(かけら)が飛ぶぞ。

メフィストーフエレス
あの篩(ふるい)はなににするのだい？

牡(それを取り卸す)
あんたが泥棒じゃったら、
わしはすぐに身露(あらわ)すつもりさ。
(牡のところへ駆け行き、透かし見せしむ)。
篩(ふるい)を透かして見ろや！
泥棒がわかっても
名指し出来ぬ人かな？

メフィストーフエレス
そんならこの釜は？

牡 と 牝
馬鹿なお人や！
釜も御存知ない、
鍋も御存知ない！

メフィストーフエレス
礼儀を心得ぬ獣だなあ！

牡
此処で拂子(はたき)をお持ち、
その腰掛けにお掛け！
(メフィストーフエレスを強いて座せしむ)

ファウスト

(その間中、一つの鏡の前に立ちて、或いはそれに近づき、
或いはそれより遠ざかり居たりしが)

あの見えるものは何だろう？何という天上の姿が
この魔の鏡に映って来ることだろう！
おお愛よ、お前の翼のうちの最も早いものを貸して
俺をあの女のいる境へ導いてくれい！
ああ、俺がこの場処に立ち留っていずに、
敢えて歩み近づこうとすると、
姿はただ霧に包まれているように見えるだけだ！----
女の一番美しい姿こそこれだ！
これはあり得ることだろうか、女というものはこうも美しいものだろうか？
俺はこの伸々と横たわった肉体に
諸天の精髓を見ずにいられようか？
これほどのものが一体地上にあるのだろうか？

メフィストーフェレス

あたり前でさあ、神が先ず六日間苦勞を重ねて、
おしまいに関自分で万歳と言ったのですもの、
少しは気の利いたものが出来ていなくちゃなりませんよ。
差し当たり堪能するまで眼で見て置きなさい。
貴君にあんな色女を見つけてあげることも、私は呑み込んでいますよ。
運が好くて、花婿になってあの女を
うちへ連れ込むことの出来る男は仕合わせですねえ！

(ファウストいつまでも鏡中に見入る。メフィストーフェレス椅子の上に
身を伸ばし、拂子(はたき)を弄(もてあそ)びつつ言葉を續く)。

俺は玉座の上の王様と云った恰好で此処に座って居る、
王者の杖も此処にこう持っている。欠けているのは王冠ばかりだ。

獣ども

(これまでくさぐさの奇怪なる動作を乱雑になしいたるが、
大声に叫びつつメフィストーフェレスの許に一つの王冠を運び来る)。

どうぞ御願ひ、
汗で以て、血で以て、
此の王冠をくっつけてくだはい！
(彼等手づつに王冠を持ち廻り、これを二片に砕き、それを持ちて跳ね廻る)。
到頭こうなっちゃった！
こちとらはしゃべったり見たりする、
こちとらは聞いたり韻(うた)にしたりする----

ファウスト(鏡に向かい)

ああせつない！俺はもう気が狂いそうだ。

メフィストーフェレス(獣を指しつつ)。

こうなると俺まで頭がぐらぐらして来るて。

獣ども

それがわしどもに旨く行けば、
それが嵌まってくれさえすれば、

それが思想というものだ！

ファウスト(前と同様の態度にて)
俺の胸は燃えだした！
何でもいい、早く立ち退こう！

メフィストーフェレス(前と同様の姿勢にて)
こうなって来ると、少なくとも、承認しなくてはなるまい、
正直な詩人もいることだけは。

(此の間牝が等閑になしいたる鍋、煮え超し始む。大なる火焰燃え立ち、煙突より
迸り出づ。魔女その火焰を穿(うが)ちつつ、恐ろしき叫び声を発して降り立つ)。

魔 女

アウ！アウ！アウ！アウ！
呪いに堕ちた畜生奴！呪われた豕(いのこ)奴！
鍋はほったらかす、奥さんには火傷をさせる！
呪われた畜生奴！
(ファウストとメフィストーフェレスを見て)。

此処に来るとは何事だえ？
此処にいるのは何者だえ？
お前達、何のつもりだえ？
誰が這いずり込んだのだえ？
火の苦をさせるぞ、
お前達の骨々に！

(彼女泡掬(あわすくい)杓子を鍋の中に突き込み、ファウスト、メフィストーフェ
レス及び獣どもに灑(そそ)ぎかく。獣ども唸(うな)え呻く。)

メフィストーフェレス

(手に持てる杓子(ほっす)を逆にして、杯や鍋釜の間を敲(たた)き立つ。)

二つになれ！二つになれ！
粥はこぼれろ！
こっぷは倒れろ！
これはただ洒落(しゃれ)だぜ、
手前の節(ふし)に合わせる
拍子(はし)だぜ、腐肉奴！

(魔女、激怒と恐怖とに充ちてあとじさりするを見て)

俺がわかるか？骸骨奴！案山子(かかし)阿魔奴！
手前のご主人様、お師匠様がわかるか？
俺の邪魔をする奴はぶんなぐるぞ、
手前も手前の猿化(ばけ)どもも敲き潰してやるぞ！
この赤い胴着がもう有難くなくなったか？
手前にはこの鳥の羽がわからんか？
俺がこの御面体(めんてい)を隠しているかい？
俺が名乗りを上げなくてはならんのかい？

魔 女

おお旦那。失礼な御挨拶を御免下さいましよ！
馬の蹄(ひづめ)が見えませんでねえ。
それに御附きの二羽鴉はどうかさいました？

メフィストーフェレス

この度はこれで恕(ゆる)してやる。
全く大分暫くの間
俺達は顔を合わせなかったからなあ。
それに世界中を舐め廻す文化という奴が、
悪魔をもただでは置かんのだ。
北方の御化けなんぞは今時もう見る事が出来んよ。
角だの尻尾だの爪だのが手前には何処かに見えるかい？
それから、なくしてしまえぬ俺の足はな、
あれでは世間の通りが悪いのだ。
そこで俺は、若い奴等が大勢やっているように、
此処何年というもの、腓(ふくらはぎ)の拵え物をつけているのよ。

魔 女(踊りつつ)

心も頭もわしゃ狂い出す、
若様サタンが又見えて！

メフィストーフェレス

こら女、名前を言っちゃいかん！

魔 女

なぜですえ？あのお名が何と致しました？

メフィストーフェレス

あれは御伽噺の本に書き込まれてから久しいものさ。
併しそれでも人間の都合がよくなったという訳でもない、
唯一の悪魔から遁れても、数の悪魔が残っているからな。
お前、俺を男爵閣下と申せ、それならとんと差し支えがない。
俺は騎士だぞ、他の騎士達同様だぞ。
お前は俺の立派な血筋を疑うまいな。
さあ見ろ、これが俺の持つ紋所だ！
(一つの猥褻なる身振りをなす)。

魔 女

はは！はは！御前様の御体にぴったりですわよオ！
お前様は悪戯者だ、昔とちっとも御変わらないわ！

メフィストーフェレス(ファウストに)

友よ、よく覚えてお置きなさい！
これが魔女の扱い方ですよ。

魔 女

旦那様方、そこで御前様方の御用向きは？

メフィストーフェレス

あの有名な液をたっぷり一杯貰いたいのだ、
だが一等古い奴でなくては困る。
年を喰うほど利き目が増すのだからな。

魔 女

お安い御用ですわ！此処に一缶ございます、
私も時折自分で舐めるのでございますが、
もうちっとだって臭味はございません、

喜んでこれを一杯差し上げましょう。(小声にて)。
でもあの人下拵えなしに上がったら、
御存知の通り、一時間とは生きて居られませんわよ。

メフィストーフェレス

これは大事な友達だ、よく利いて貰わなくてはならないのだ。
この人にはお前の厨の極上のものを差し上げても惜しいとは思わない。
お前、例の圈を描いて、例の呪文を唱えて
たっぷり一杯差し上げてくれ！

(魔女奇怪なる身振りにて一圈を描き、不思議なるものを数多(あまた)その中に配
列す。その間、杯鳴り鍋響きて音楽をなす。彼女最後に大型の一書を取り出し、尾長猿
等を圈の中に入らしむ。これ、或いは彼女のための卓子となり、或いは炬を乗(と)るべ
きものなり。さてファウストに胸(めくば)せして彼女に歩み寄らしむ)。

ファウスト(メフィストーフェレスに)。

おい、云い給え、どういうことになるのだい？
この気違い染みた道具立て、この狂乱の身振り、
この愚劣極まる詐欺、みんな
とうから俺は知っている、大嫌いだ。

メフィストーフェレス

なに、道化芝居さ！笑えばそれですむのですよ。
そんなに厳格な人になるのはおよしなさい！
あいつも医者だから、手品の真似をしなくてはならないのです、
薬が貴君によく利いてくれるように。
(ファウストを強いて圈の中に歩み入らしむ。)

魔 女

(大なる強調を以て、書の中より読誦し始む)。

爾(なんじ)須(すべから)く会(え)すべし！
一より十を作せ、
二は去るに任せよ、
直ちに三を作せ、
然らば爾(なんじ)富まむ。
四は捨て去れ！
五と六とより、
かく魔女は云う、
七と八とを作せよ、
かくて円成(えんせい)せり ----
九は一なり、
十は無なり。
これをこれ魔女の九九と謂う！

ファウスト

俺には、婆さん熱に浮かされて物を言っているように思われるよ。

メフィストーフェレス

まだまだあれでおしまいじゃありません、
私はよく知っていますが、あの本は全体があの調子です。
私はあれで随分暇潰しをしました、
まるで矛盾している事は

智者にも愚者にも同様に深秘に聞こえますからね。
我が友よ、学芸は新古同様です。
これが何時の時代でも仕来(しきた)りでした----
三と一と、一と三とによって
真理の代わりに迷妄を拡めるのが。
何の妨げも受けずに人はこんなことを饒舌ったり教えたりします。
好きで馬鹿にとり合う者が何処にあるものですか？
一体人間は、ただ言葉だけを聞かせられても
猶それには何か思想の中味がある筈だと思うものです。

魔 女(誦し続く)

知識の
高遠なる力は
全世界に秘せられたり！
ただ思量せざる者に
その力を贈与せらる。
労苦を須(もち)いることなし。

ファウスト

女は何という無意味なことを俺達に饒舌ってきかせるのだ？
俺の頭はすぐにも割れてしまいそうだ。
俺は十万人の馬鹿が群団をなして
一斉に饒舌るのを聞くような気がする。

メフィストーフェレス

もう好い、もう好い、おお、えらい巫女(みこ)さん！
お前の薬を持って来て、杯に
早速縁のところまで注ぎ充たしてくれ。
俺の友達にはこの薬があたる心配はない----
此の人は大ぶ位のついている人で、
これまで色々好い薬を嚙(の)んで来ているのだ。
(魔女数多き儀式を以て薬を鉢に注ぐ。
ファウストこれを口に当つるとき、軽き炎燃え立つ)。

ぐいと飲み下しておしまいなさい！一息にぐいぐいと！
それはすぐ貴君の心を嬉しくしてくれるでしょう。
悪魔との交際(つきあい)に君と僕とで行くお人だ、
それが火焰なんぞにたじろくのですか？
(魔女圈を解く。ファウスト踏み出づ)。

メフィストーフェレス

さあ、まっすぐに出かけましょう！じっとしていちゃいけません。

魔 女

貴君にお薬が好く利きますように！

メフィストーフェレス(魔女に)

何かお前の御用に立つことがあるなら、
ヴァルプールギスのときに遠慮なくそうお云い。

魔 女

此処に一つ歌がある！それを時々お歌いなさると、
格別利き目があることにお気が附くでしょう。

メフィストーフェレス

さあ、早くいらっしゃい、導きに任せなさい。
貴君は汗をかくことがどうしても必要なのです、
薬の力が内にも外にも一面に染み渡るように。
高等な懶惰を尊重することも追々御伝授申しませう。
貴君が心からの温かい喜びで、愛の童(クピード)が動き出し、
あちこちぴょんぴょん跳ね廻ることを覚えるのももうじきです。

ファウスト

ほんのちらりとでも、俺にもう一目鏡を見さしてくれ！
あの女姿が何とも云えず美しかった！

メフィストーフェレス

駄目！駄目！ありとある女の典型を、
じきに正身で眼の前に見せてあげますから。(小声にて)。
体にあの薬がはいっているから、お前は
今にどの女をもヘレナと見るぞ。

街

ファウスト。マルガレーテ行きずりに。

ファウスト

もし、美しい御嬢さん、不躰ながら、僕の腕を御貸しして
御送りしてあげたいのですが、許して下さいでしょうか？

マルガレーテ

御嬢さんでも、美しくも、ありませんわ。
送っていただかなくてもうちへ帰れます。
(振り切りて退場)。

ファウスト

大空にかけて、あの子は美しいなあ！
あんなのはこれまでついぞ見たことがない。
おとなしやかで、慎みがあって、
その癖いくらかつんとしたところもある。
あの唇の赤味、あの頬っぺたの艶(つや)、
俺はこの世の限り忘れられまい！
あの眼を伏せた様子が
深くこの胸に刻み込まれた。
それにあの手短な撥ねつけようったら、
あれは全くぞくぞくものだ！
メフィストーフェレス登場。

ファウスト

ねえ、あの子を僕の手に入れて呉れなくちゃ困る！

メフィストーフェレス

へえ、どの子ですか？

ファウスト

たった今通って行った娘さ。

メフィストーフェレス

あすこに行くあれですか？あれは受け持ちの坊主のところから帰って来たのです、坊主は作った罪をみんなあれに赦してやったのです。私は椅子のすぐそばをそっと通って見て来ました。ひどく罪のない代物ですよ、罪の持ち合わせがなくて懺悔に行くのですからな。あんなのは僕の手には合いません！

ファウスト

それでももう十四は超えているだろうが。

メフィストーフェレス

君は極道(ごうどう)ハンスのような口を利きますね、奴さん、可哀い花ならどれもこれも自分のものにしがって、どんな御身分でもどんな御情けでも、自分が摘んで摘み取れぬものはない筈だと自惚れる奴さ。併しいつでもそうとは行きませんよ。

ファウスト

ねえ、尊大先生、法律問題は願い下げにしたいですね！手短に君に言って置くがね、あの甘そうな若い体が今夜僕の腕の中で寝(やす)むようにならなかつたら、夜中には君とお別れだよ。

メフィストーフェレス

考えて下さい、出来ることと出来んこととがありますよ！僕には少なくとも十四日かかりますね、ただ機会を覗(うかが)うだけでも。

ファウスト

僕にただ七時間の暇さえありやあ、悪魔の手なんぞ借りるまでもないねえ、あんな小娘を誘惑するには。

メフィストーフェレス

君はもう仏蘭西人のような物言いをしますね。だが御願いだ、機嫌を悪くしないでください----いきなり物にして何になります？それよりも、歓喜(よろこび)というものは、先ず持ち上げたり、ぐるぐる廻りをさせたり、いろいろお飯事をやり通して、お人形さんを捏(こ)ねたり寝けたりする方がぐっと大きいものですよ。南国の小説によくある寸法でね。

ファウスト

そんな面倒をしなくたって、御腹(おなか)のすき加減は丁度いいんだ。

メフィストーフェレス

まあ洒落や戯談はよしにしましょう。

御聞きなさい、あの美しい子のことは
どうしたって早くというわけには行きません。
強襲という奴ではどうにもならない。
我慢して策略で行く気にならなけれあ。

ファウスト

あの天使の持ち物を何か持って来てくれ！
あの子の休み処へ僕を連れて行ってくれ！
あの子の胸にかかる襟結びでも、靴下留めでも、
恋の慰めに僕に持って来てくれ！

メフィストーフェレス

僕が貴君の御悩みの、御役にも御用にも
立ちたいと思っていることを見て貰うため、
ちっとの時も無駄にせずに、
今日がうちにも貴君をあの子の部屋へ御連れしましょう。

ファウスト

そうしてあれに逢えるか？あれを手に入れられるか？

メフィストーフェレス

駄目！
あれは隣の上さんのところへ行っているでしょう。
その隙に貴君がまるで一人っきりで、
未来の歓楽を心一杯望み待ちながら、
あの子の匂いの籠もる境で飽きるほどゆっくりすることが出来ます。

ファウスト

もう行けるかい？

メフィストーフェレス

まだ早過ぎる。

ファウスト

あの子への贈り物を心配してお置き。(退場)。

メフィストーフェレス

すぐに贈り物か？これはいい気前だ！これなら成功するだろう！
俺はうまい場処を沢山、
昔埋められた宝を沢山、知って居る。
少しばかり調べて見なくてはならぬ。(退場)。

夕

小さき清楚なる室。
マルガレーテ弁髪を編みてわがねつつ。

マルガレーテ

わたし何か出してもいいわ、今日の方が
どなただかわかりさえすれば！
ちっとも嘘のなさそうな様子の方だったこと、
それに屹度良いおうちの方だわ。
あの方の顔を見てそう読めたわ----

それでなければあんな遠慮のないことはなさないわ。(退場)。

メフィストーフェレス。ファウスト。

メフィストーフェレス
おはいり、そおっと。さあ、おはいり！

ファウスト(暫く沈黙せる後)。
お願いだ、僕を一人で置いてくれ！

メフィストーフェレス(四辺を覗き見しながら)
どの娘でもこう綺麗にして置くというわけのものではない。(退場)。

ファウスト(注意深く見廻しつつ)
心嬉しい黄昏の光よ、好く来てくれた！
お前はこの聖所を籠めてほの動いている。
俺の心臓を引き攫(つか)んでくれ、甘い恋の悩みよ！
お前は希望の露を命に、喘(あえ)ぎつつも生きているのだ。
静けさの、整頓の、満足の情が
どんなにこのめぐりに息づいていることだろう！
この貧しさの中にあって、何という充ちようだ！
この獄(ひとや)の中にあって、何という浄福だ！
(床の傍にある柔革の椅子に身を投げかく)。

おお、俺を受け容れてくれ。お前はあれの先祖だちを
喜びにつけ痛みにつけ腕を拵(こしら)えて迎え容れて来たことであろう！
幾度か、ああ！この長老の王座を取り巻いて、
一隊の子供がぶら下がって来たことであろう！
恐らく、生誕の贈り物の御礼を云うため、
俺の可哀い者が、子供らしくまるまるした頬をしながら、此处で
お祖父さんの萎(しな)びた手に敬虔に接吻したかも知れぬ。

おお、処女(おとめ)よ、たつぷりと饒(ゆた)かに、きちんと整ったお前の精神が
身の周りに戦(そよ)いでいることを俺は感ずる。
その精神が母らしく日毎にお前を導いて、
卓子(ていぶる)の上に卓布(きれ)を清らかに拵(こしら)えさせ、
床に踏む砂をさえ波打たせるようにさせるのだ。
おお、可哀い手！いと好く神々に似た手！
お前のお陰でこの小舎が天国になるのだ。
そうして此处は！
(寢室の帷の一片を塞ぐ)。

何という歓喜の戦慄が俺を襲うことだ！
此处に俺はたつぷり何時間も低徊(ていかい)していたい。
自然よ！此处で、軽らかな夢の中に、
天使に生まれ付いて来た者を育て上げたのだな。
此处に、温かな命に柔らかな胸を充たされて
あの稚子(おさなご)が寝ていたのだな。
そうして此处で、聖にして純なる勢用(はたらき)を以て
あの神々しい姿がおのづからほぐれて現れて来たのだな！

ところでお前は？お前を此处へ連れて来たものは何だ？
どんなに奥深く動かされていることを俺は感ずるだろう！

お前は此処で何をする気だ？なぜお前の胸は重くなるのだ？
憫(あわ)れむべきファウスト！お前はまるで人違いがしてしまった。

此処では魅惑の靄(もや)が俺を取り巻くのか？
慕(まっしぐ)らに受用しようとする心が俺を駆り立てていたのに、
それなのに俺は、恋の夢に身がとろけるような気がする！
我々は気の圧の変わるまにまに弄(もてあそ)ばれるおもちゃなのか？

若しこの刹那にあれがはいって来たら
この不作法に対してお前はどんなにか罰せられるであろう！
大の男奴、ああ何という小ささだ！
お前はところけ果てて、あの女の脚下に横たわるだろう。
メフィストーフェレス来る。

メフィストーフェレス

早くしなさい！あれが下を遣って来るのが見えますぜ。

ファウスト

行こう！行こう！僕はもう決して帰って来ない！

メフィストーフェレス

此処に一つ匣(はこ)があります、相応に重いです、
僕はこれをさる所から持って来ました。
何でもいいからそれを此処の棚へ入れてお置きなさい、
誓文間違いなし、あれは気が遠くなってしまうでしょう。
僕は貴君のために小物を色々その中に入れました、
もう一つの方がこっちの手に入るように。
実際、子供は子供で、玩具は玩具ですからな。

ファウスト

どうも迷うなあ、そんなことをしたものだろうか？

メフィストーフェレス

貴君はあの宝を惜しんで置こうとでも思うのですかい？
そんなことなら貴君の色気に向かって忠告しますがな、
大事な、結構な時間を潰したり、
僕にも此のさき骨を折らせたりすることはよしたらいいでしょう。
まさか貴君はけちなのじゃありませんまいね！
こっちは頭を搔く、手を擦ると----
(小匣(はこ)を棚に入れ、再び錠を卸す)。

さあ行きましょう！大急ぎで！----
あの旨そうな若い子を、
心の願いや思い通りに貴君に靡(なび)かせようためにですぜ。
それなのに貴君は変な顔をしていますなあ、
教室へはいらなくてはならんかのように、
又貴君の前に灰色の正身(まさみ)を現して
物理学と超物理学とが立ってでもいるかのように！
さあ行きましょう！(退場)

マルガレーテ灯を持ちて

マルガレーテ

此処は何て蒸し暑いでしょう、鬱陶しいでしょう。

(窓を開く)

その癖外はそんなに暑くもないのに。

なんだか知らないけど、わたし変な心持ちがするわ----

母(か)あさんが家へ帰って来てくれるといいんだけど。

体中ずうっと寒気が通るわ----

ほんに私は馬鹿な、怖がり屋の女なのねえ！

(着物を脱ぎつつ歌い始む)。

昔ツレーに王ありき、

墓まで渝(かわ)らぬ真心(まごころ)に

死に行く妹(いも)は君がため

黄金(こがね)の杯遺しけり。

これを上なき宝にて

君は乾しけり宴(えん)毎に。

君の瞳は霑(うるお)いぬ、

この杯を含むたび。

君は死ぬべくなりしとき、

国の町々数えつつ、

すべて世嗣に譲れども、

杯のみは留め置きぬ。

君は宴を賜いけり、

騎士は周りに集いけり、

代々の広間は広やかに、

海に臨める城の上。

老いし酒徒(のみて)は其処に立ち

限りの豊酒(とよき)飲み干して、

聖(きよ)き杯投げましぬ、

下行く湖のその中に。

落ちて、水(み)ずきて、海深く

沈む杯見送りて、

君は眼(まなこ)を閉じ行きぬ、

飲まずなりにき雫(しずく)だに。

(着物を入れむとて戸棚を開き、宝匣(はこ)を見出づ)。

どうしてこんな美しい小匣が此処へはいつているのだろう？

わたし間違いなく錠をかけて置いたのに。

本当に不思議なこと。この中には何がいつているのでしょうか？

もしかすると誰かがこれを質草に持って来て、

母あさんがお金を貸してあげたのかも知れないわ。

おや紐に鍵がさがっている----

いいからわたしあけて見よう！

まあ、これは？びっくりしたわ！御覧、

わたし生まれてからこんなものは見たことがないわ！

身飾り！これなら貴婦人だって

一番晴れの御祝いに附けて行けるわ。

この鎖はわたしに似合うかしら？

一体この立派なものは誰のでしょう？
(これにて我が身を飾り、鏡の前に立つ)。

この耳輪だけでもわたしのものと好い！
早速、まるで人違いがして見えるわ。
若い娘さん、一体貴女が美しくたって何になるの？
それはみんな結構な良いことだけれど、
それはただそれだけのことで、人が構ってくれはしない。
人が貴女を褒めるのも半分は気の毒づくだわ。
何でもお金が目当て、
お金次第だわ、
みんな。ああ、どうしよう、わたし達貧乏人は！

散歩道

ファウスト物思いつつあちらこちらと歩み居る。
メフィストーフェレス来たり伍す。

メフィストーフェレス

糞、はねられた恋のありったけ、地獄の何彼(なにか)も証人になれ！
これより癪なことがあったら、そいつを呪ってやろうものを！

ファウスト

どうかしたか？何がそんなに君を痛めつけるのだ？
僕は生まれてからそんな変な顔を見たことがない！

メフィストーフェレス

僕はすぐにも悪魔にさらわれない、
若し自分が悪魔でなかったなら！

ファウスト

頭の何処かが狂ったのかい？
間違いのようにあばれるのは、なかなか君の柄に合うねえ！

メフィストーフェレス

まあ思っても見て下さい、グレーチヒェンに持って来てやったあの飾りを、
あれを坊主がふんだくって行きやがったのです！----
母親があれを見せられると、
すぐに何かしら気味が悪くなったのですね。
あの女は全く、いやに鼻の利く奴で、
いつも祈祷書の中へ鼻をつっこんだり、
一つ一つ道具を嗅いで見て、
物の聖か俗かを嗅ぎわけたりするのです。
そこであの飾りを見てはっきり嗅ぎ付けたのですな、
あれには祝福なんぞがあまり附いてはいないことを。
あの女はこう言ったものです----「娘や、不義の宝というものは
魂を虜にして、血を蝕(そこな)い滅ぼすものですよ。
聖母様へ御上げ申そうね、
天のマナで私達を喜ばして下さるよ！」

可哀いマルガレーテは、口を歪めてこう思いました----
まあ、これは貰った馬じゃないか、
それにまさか！あれを此処へ、あんなに親切に
持って来てくれた人が、神様に背く人でもあるまいに、と。

母は坊主を呼んで来た。
坊主はいきさつを聞くや聞かずに
代物を見て気をよくした。
奴のほざきようと云ったら----「御殊勝なことをござります！
勝ちを得る者は、御利益を授かります。
教会は丈夫な胃の腑を持って居ります、
国々をみんな喰べ尽くしても、
ついぞ食当たりはなされませぬ。
親愛なる御婦人方、ただ教会だけが、
不義の宝を消化(こな)しきれるのですぞ」、だとさ。

ファウスト

それは天下通用の遣り方だ、
猶太(ユダヤ)人や王様も亦その手を遣りかねないね。

メフィストーフェレス

それから腕輪一つ、鎖も指輪も、
安菌(やすきのこ)のようにねじ込んで、
胡桃(くるみ)を山盛り一籠貰ったときよりも
少なからず多からず御札を言って、
あらゆる天の報酬(むくい)を約束しました----
そうして女どもはひどくそれを有り難がっていましたよ。

ファウスト

してグレーチヒェンは？

メフィストーフェレス

気もそわそわと座って居ます。
為たいことも為べきことも、自分で自分がわからずに、
昼も夜も金銀細工のことを思い続けています、
それよりも猶呉れ手のことを。

ファウスト

可哀い者の胸の痛みは僕も気の毒に思う。
君、すぐに新しい細工物を一つ都合したまえ！
初めの奴は実際そう大したものでもなかったよ。

メフィストーフェレス

はい、はい。旦那には何でも子供の遊び事だ！

ファウスト

そうしてさっさと僕の思わく通りにして貰おう！
隣の女に取り入りたまえ----
この悪魔、べとべと粥のようにしていないで、
新しい飾りを一つ持って来たまえ！

メフィストーフェレス

へえ、お旦那様、真底から喜んで致しやしょう。
(ファウスト退場)。

メフィストーフェレス

ああいう恋に迷った馬鹿は、

太陽でも月でも星という星でも、
恋人の御慰みに、空中に打ち上げかねませんね。(退場)。

隣 女 の 家

マルテ一人。

マルテ

神様がうちの人を御赦し下さるように、
あの人が私にした仕向けはよくなかった！
あとさき見ずに世間へ飛び出して行って、
私をばひとりぼっちで藁床の上へ残して置きなされた。
私はあの人を困らせるようなことは本当に仕はしなかったのに。
神様も御存知の通り、随分真心からあの人を愛していたのに。

(泣く)。

もしかしたらあの方は死んでしまっているかも知れない----ああ悲しい----
せめて死亡証でも手にはいつてくれたら！

マルガレーテ来る。

マルガレーテ

マルテ小母さん！

マルテ

グレーテさん、どうしたの？

マルガレーテ

わたし膝を衝(つ)いて倒れそうだわ！
又こんな小匣があつたのよ、
わたしの戸棚に。黒檀匣で、
中にはいつているものはとっても立派で、
初めのものよりやあずっと贅沢なの。

マルテ

貴女それをお母さんに言っちゃいけないよ、
又懺悔のときすぐに持つて行くだろうから。

マルガレーテ

まあ見て御覧なさいよ！まあ眺めて御覧なさいよ！

マルテ(マルガレーテを飾り立つ)。

ほんに、お前さんは仕合わせな人だよ！

マルガレーテ

でもつまらないわ、こうして往来へ出たり、
教会で人に見られたりすることが出来ないのですもの。

マルテ

ちょいちょい私のうちへ来て、
此处でそっと飾りをつけて御覧よ。
小一時間も鏡の前を散歩して御覧よ、
私も一緒になって楽しんであげるからね。
そのうち何かのきっかけが出来たり、祭りがあつたりするだろう、
そのときおいおいに人に見せるようにするのさ----
始めには小さな鎖を一つ、それから耳に真珠、という風に。

お母さんも大抵気がつくまいが、又何とかかこつけようもあるだろうよ。

マルガレーテ

誰がこの二つの箱を持って来たのでしょうか？

何がどうしたのかわからないわ！

(扉を敲く音す)。

マルガレーテ

ああ大変！母さんじゃないでしょうか？

マルテ(窓掛けより透かし見る)。

知らない男の方よ----おはいんなさい！

メフィストーフェレス登場

メフィストーフェレス

構わず、ずんずんはいって参りました。

御婦人方の御免しを願わなくてはなりません。

(恭しくマルガレーテに礼をして退く)。

マルテ・シュヴェールトライン夫人に御目に掛かりたいのですが！

マルテ

私でございますわ、貴君様は何の御用で？

メフィストーフェレス(小声にて彼女に)。

これで貴女と御知り合いになりました、私にはそれだけで結構なのです。

大そう御身分の高い御客様ですね。

勝手を働いてすみませんでした、

昼過ぎに又参りましょう。

マルテ(声高に)。

お聴きよ、御前、世界中のものにかけて！

この方はお前が何処かの令嬢だと思っているのよ。

マルガレーテ

まあ、私は可哀そうな、若い女の子よ。

ああ神様！この方はあまり御鄭重過ぎるわ、

飾りも細工物も私のではないんですのに。

メフィストーフェレス

いや、飾りだけの話ではありません。

御様子も眼付きも大そうはつきりしていらっしゃいます！

このまま居て宜しければ、こんな嬉しいことはありません。

マルテ

御用向きは何でしょう？幾重にもどうぞ----

メフィストーフェレス

もっと目出たい話だといいいのですがねえ！

その尻を私の方へ持って来ないように願いますよ----

貴女の御主人は亡くなられました、そうして貴女によろしくということでした。

マルテ

亡くなったんですって？実のある人だったのに！おお悲しい！

うちの人が亡くなってしまった！ああ、私は気が遠くなる！

マルガレーテ

ああ！いい子の小母さん！力を落としちゃ駄目よ！

メフィストーフェレス

まあ悲しい話を御聞きなさい！

マルガレーテ

だからわたし一生恋はしたくないわ。
亡くなられたら死ぬほど悲しいでしょう。

メフィストーフェレス

歓楽(よろこび)の終(はて)に憂(うれい)あり、愛の終に歓楽ありですよ。

マルテ

あの人の最後のことを御話なすって！

メフィストーフェレス

御主人はパーヅアに葬られて居ます、
聖アントーニウスの御寺の傍らに。
永遠の涼しい臥床(ふしど)にふさわしく
よく浄められている場所に。

マルテ

その他何も私にことづかりはなさいませんでしたか？

メフィストーフェレス

あります、大きな・むづかしい御願いが----
自分のために三百度の弥撒(みさ)を上げさせて貰いたいということで！
伝言はそれだけのことで、私の財布はからっぽです。

マルテ

まあ！飾り銭の一つもないの？細工物一つもないの？
職人の徒弟(でっち)だって、荷物入れの底にとって置いて、
記念のためにしまっておいて、
餓えても乞食をしても離さないのに！

メフィストーフェレス

奥さん、心(しん)から御気の毒ですよ。
でも実際お金を撒き散らしたわけでもないのです。
それに御自分の過ちをひどく後悔していましたっけ。
さよう。それよりも御自分の不仕合わせをもっと歎いていましたっけ。

マルガレーテ

ああ！人間という者は本当に不仕合わせな者なのねえ！
わたしきっとあの方のために幾遍も鎮魂(レクイエム)の御祈りを唱えますわ。

メフィストーフェレス

貴女はすぐに結婚なさっても大丈夫ですよ----
貴女は人好きのする御子さんですね。

マルガレーテ

あら、まだよ。今そんなわけには行かないわ。

メフィストーフェレス

御亭主でなかったら、差し当たりいい人でもいいでしょう。
それは此の上もない天の賚(たまもの)の一つですよ、
ああいう結構な者を腕にかかえるのは。

マルガレーテ

そんな事はこの土地の仕来たりではなくってよ。

メフィストーフェレス

仕来たりであつてもなくつても！兎に角出来ませう。

マルテ

もっと話して下さいね！

メフィストーフェレス

私はあの方の死の床に立ち合いました。
それは肥料溜(こやしだめ)よりはちいっと好い、
腐れかかった藁(わら)のものでした。でも基督信者として死にましたよ、
ただ罪滅ぼしの借りが大分残っているということでした。
こう叫びましたっけ----「わしはどんなに自分が心から憎いだろう、
わしの商売もこんなにして、わしの女房もこんなにして残して行こうとは！
ああ！思い出しても死にそうだ。
此の世にいるうち、あれに宥(ゆる)して貰えたらなあ！」----

マルテ(泣きながら)

優しい人ねえ！私はとっくに宥(ゆる)して上げて居ました。

メフィストーフェレス

「だが、神様が御存じだ！あれがわしより悪かった」。

マルテ

それはあの人(ひと)の嘘(うそ)っぱちだわ！なんて事でしょう！墓(はか)の縁(ふち)で嘘(うそ)をつくなんて！

メフィストーフェレス

きっと引息時(ひきいきどき)の謔言(うわごと)だったでしょう、
多少でも人間という者を知っていれば、すぐにわかりますよ。
こう云いましたっけ----「わしは暇潰しにぽかんとしていたことはなかった、
段々子供は出来るし、あれのための麵麴(パン)も儲けなければならないし、
それも極贅沢(ごくぜいたく)な意味の麵麴(パン)と来ているし、
わしは一度だって自分の分を平和に食べることは出来なかった」。

マルテ

まあ、あの人(ひと)は、ありったけの実意(じじ)もありったけの愛(あい)も、
夜昼(よるひる)なしの苦勞(くろう)も忘れてしまつてさ！

メフィストーフェレス

そうでもありません、そのことは心から思っていたのです。
こう云いましたっけ----「そこでマルタを發つときは、
わしは女房子(にようぼうし)のために熱心(ねっしん)籠めてお祈り(いのり)したものだ。
天(てん)もわし達(たち)に幸(さい)いを御授け(ごさづ)けになって、
わし達のふねは土耳其(トルコ)船(ふね)を一艘(いっそう)攫(つかま)えた。

それは大ズールタンの宝を運ぶ船だった。
其処で勇ましい働きに御褒美が出た、
そうしてわしも働き相応に、
ちゃんとした割前を貰ったものだ」。

マルテ

まあそう？まあ何処で？あの人は多分それを埋めて置いたでしょうねえ？

メフィストーフェレス

ところが四方の風がそれを何処へ飛ばしたやら、誰が知るものですか。
一人の美しいそれしゃがあの人の面倒を見てくれました、
知らぬナーペルでぶらついているうちに。
それがたっぷり愛と誠を尽くしたので、
あの人の死ぬ間際まで、それが骨身にからんでいましたっけ。

マルテ

ならず者！子供達の宝盗人(たからぬすつと)！
どんなに落ちぶれても、どんなに困っても
あの自墮落はやめられなかったのかねえ！

メフィストーフェレス

ええ、その通り！その代わりには死にましたよ。
私が今貴女の立場にいるんなら、
一年間おとなしく喪を弔って、
その間にも新しい色男(いろ)に目星をつけるということにしますね。

マルテ

ああ神様！それでも先の亭主のような人は、
広い世間にもう一人と、滅多に見つかるものじゃありません！
ああいう気の好い馬鹿小僧はとんとあり得ますまいよ。
惜しいことには、あんまりぶらつくことが好きでした、
ぼろっかいだの、他処の葡萄酒だの、
あの憎らしい賭博(ばくち)まで。

メフィストーフェレス

なる程、なる程。それで持てたというものですな、
男の方でもざっとそのぐらい
貴女を大目に見ていたとすれば。
誓文、私もその条件でなら、貴女と指輪を交換しますな！

マルテ

おや。この方は戯談ばっかし！

メフィストーフェレス(独語)

さあ折を見て逃げ出さなくちゃあ！
この女は悪魔からも言葉質をとり兼ねない。
(グレーチヒェンに)。
ところで貴女の心臓の方は如何です？

マルガレーテ

おっしゃるのは何のこと？

メフィストーフェレス(独語)

可哀い、罪のないおぼこだなあ！
(声高に)。
さようなら、御婦人方！

マルガレーテ
さようなら！

マルテ
どうぞ一言おっしゃって下さいましね！
私は証明が一つ欲しいのです----
何処で、どんなに、何時、うちの人で死んで、葬られたか。
私は前々からきまりのいいことが好きでした、
あの人が死んだことを週報の公示でも読みたいと存じますが。

メフィストーフェレス
いいですとも、奥さん。二人の証人の口があれば
何処へ行っても真実は承認されます。
私にはもう一人、随分様子のいい仲間が居るのですが、
その男を貴女のために裁判所へ出させましょう。
此処へ連れて来ますよ。

マルテ
おお、どうぞそうなすって！

メフィストーフェレス
そうして此処にこの娘さんも御出でになるのですね？----
いい少年ですよ！随分旅もしているし、
お嬢さん方には万端礼儀を心得ているし。

マルガレーテ
わたしその方の前へ出たら、恥ずかしくてきっと真っ赤になってしまうわ。

メフィストーフェレス
地上のどんな王様の前へ出ても、それには及びませんよ。

マルテ
うちのうしろの彼処の庭にいて、
私達、今日の夕方、御二人を御待ちしますわ。

街
ファウスト。メフィストーフェレス。

ファウスト
どうだい？ 旨く行きそうかい？ じきにどうにかなりそうかい？

メフィストーフェレス
極上！ 貴君も燃え上がっているようじゃありませんか？
程なくグレーチヒェンは貴君のものですぜ。
今晚隣のマルテの所であの子に逢わせます----
その女は、取り持ちや山窩(チゴイナー)の役をさせるには
持って来いの奴ですよ！

ファウスト

旨いな！

メフィストーフェレス
ところがこっちにも頼まれ事があるんです。

ファウスト
何かして遣れば、又して貰う理由があるからね。

メフィストーフェレス
我々はただ法律上有効な証人に立って、
あの女の亭主ののびてしまった手足が
パーミアの有難い場所に安息(やす)んでいることにして遣ればいいんです。

ファウスト
仲々智慧者だね！我々は先ず其処へ行って来なくてはなるまい！

メフィストーフェレス
御目出た尊者だ！それに及ぶものですか。
碌に知らなくとも、ただ証言をしてやるのです。

ファウスト
君にもっといい智慧がないんなら、その計画はやめだ。

メフィストーフェレス
おお御聖人様！貴君は聖人でいらっしゃるでしょうよ！
一体これが生まれて始めてのことだとでもいうのですかい、
貴君が偽証をなさるのは？
神や世界や、世界の中に動いているもののことに就いて、
人間や、人間の頭と胸の中で働いているもののことについて、
貴君は大した勢いで定義を下しはしなかったのですかい？
しかも凶太い額付きで、思いきって胸を張りながら？
そうして正直に心の底を探って見たら、
貴君はまっすぐに白状しなくてはならないでしょう、
そんなことはシュヴェールトライン氏の死を知らないと同様に知らなかったことを！

ファウスト
君は相変わらずの虚言者(うそつき)だ、詭弁家だ。

メフィストーフェレス
そうでしょうよ、若し僕がもう少し深いところを知っていなかったら。
明日になると、いっばし名誉ある者のように、
可哀そうなグレーチヒェンを騙し込んで、
ありとあらゆる魂の愛をあの子に誓うのじゃありませんか？

ファウスト
そうして真実真心(まごころ)から。

メフィストーフェレス
いいでしょう、結構でしょう！
それから永遠に渝(かわ)らぬ真実だの愛だの、
たった一つの、全能以上の情熱だの----
そんな誓いも真心からでしょうか？

ファウスト

よせ！その通りだ！----俺がしみじみと感じて、
その感情の、そのせつなさの
名前を探して、それを見附け兼ねて、
そこで全心を挙げて世界の隅々をさまよった挙げ句に、
あらゆる最高の言葉を攫(つか)もうとして、
俺の身を焼くこの熱火を
無限だ、永遠に永遠だと名づけたところで、
それが悪魔もどきの嘘の戯れなものか？

メフィストーフェレス

それでも俺の方が本当です！

ファウスト

おい！このことは覚えて置け----
頼むから俺の肺をいたわって呉れよ----
誰でも議論に勝とうとして、舌一枚だけ頼みにしていれば、
其奴が勝つにきまっている。
行こう、俺は無駄口に厭きた。
君の勝ちだよ。何しろ俺はいやとは云えないのだからな。

庭

マルガレーテはファウストの肘に、マルテはメフィストーフェレスに
伴われて、往きつ来つ散歩し居る。

マルガレーテ

私よくわかりますわ、貴君はただ私をいたわって、
うまくばつを合わせて、私を恥ずかしがらせるのですわ。
旅をなさる方は、寛い御心持ちから、
我慢して喜んで下さるのに馴れていらっしゃるのよ。
私よく承知して居ますわ、世の中を見て来たこういう方に
私のつまらないお話なんかお慰みにならないことは。

ファウスト

貴女の一寸した一眼でも、一言葉でも、
世界のどんな智慧よりも嬉しいのです。
(女の子に接吻す)

マルガレーテ

あら、不似合いなことをなさらないで！貴君、こんな手にきすなんかなさるの？
この手はこんなに穢(きたな)いでしょう、荒れているでしょう！
私、どんなことでもみんなしなければならなかったのですもの！
おかあさんが随分やかまし屋ですから。
(行き過ぐ)。

マルテ

ねえ、貴君はいつもいつも旅ばかりなさるの？

メフィストーフェレス

どうも商売と勤(つと)めとに追い廻されるのでねえ！
処々で随分発つのがつらいこともありますかね、
留まって居るわけには行かんのですよ！

マルテ

若い時分には自由に世界中を
そんなにあちこち歩き廻るのもよござんすがね。
でも有難くない時が追々近づいて来るでしょう、
そのとき男やもめのままで、一人でお墓の方へ足を引き擦って行くのは、
どなたもいい心持ちとはおっしゃいませんよ。

メフィストーフェレス

私もそれを遠くから見ると身慄いしますよ。

マルテ

ねえ、だから後れぬうちに思案なさいましょ。

マルガレーテ

そうでしょう、目が離れれば心が離れるでしょう！
貴君はお世辞がなれっこになっていらっしゃるわ。
貴君は、私なんぞよりはずっと物のわかった
御友達を沢山持っていられっしゃるでしょう。

ファウスト

とんでもない！世間で物わかりがいいと云っているのは、
どうかすると自惚れと鼻先思案に過ぎません、本当ですよ。

マルガレーテ

そうかしら？

ファウスト

ああ、単純というものの、罪のなさというものは、自分自身のことも、
自分の神聖な尊さのことも、知らずにいるのですかねえ！
謙遜だの平民の身分だのというものこそ、
恵み深く傾かち与える自然の最高の賁(たまもの)なのに----

マルガレーテ

貴君はほんの一寸の間私のことを思っただけですが、
私にはじっとして貴君のことを思っている時間が随分多いことでしょう。

ファウスト

貴女は一人で居ることが多いのでしょうかね？

マルガレーテ

ええ、私どもの所帯はほんの小さいものですが、
それでも捨てて置くわけには行きませんの。
女中がいまませんでしょう。御料理やら御掃除やら編み物やら
針仕事やら、それに朝から晩まで駆け歩かなければなりませんの。
おかあさんと来たら、何から何まで
本当に几帳面ですもの！
それも、そんなに儉約をしなくては困るからというわけではありませんのよ。
私どもは余所よりもずっとゆったりして暮らして行けますの----
父がちょいとした財産を、一軒の小さい家と
町外れの小さい庭とを、残してくれましたの。
でも私、この頃は充分ひっそりして暮らす日がございますわ。
兄は兵隊に出ていますし、
小さい妹は亡くなりますし。

随分私、あの赤ちゃんには困りましたわ。
でも私、あの苦労ならもう一度喜んで引き受けたいと思いますの。
本当に可哀い赤ちゃんでしたもの。

ファウスト

貴女に似たら天使だったでしょう。

マルガレーテ

私があの子を育てましたの、あの子も心(しん)から私になついて居ましたの。
父が亡くなってから生まれましたでしょう。
母はとても駄目だと思ったぐらい
弱りきってずっと臥せって居ましたの。
ですから日立ちも大ぶ長びいて、じりじりに漸く癒(なお)りましたわ。
それですもの、あの可哀そうな小さい者に
自分で御乳を遣ることなどは思いも寄らなかったでしょう。
それで私一人っきりで育てましたの、
牛乳とお水とで。それで私の子になりましたの。
私の腕に抱かれたり、私のお膝に乗ったり、
あの子は嬉しがって、跳ねて、大きくなりましたわ。

ファウスト

貴君は屹度、最も淨い幸福を味わったでしょう。

マルガレーテ

でも色々つらいときも随分ございましたわ。
夜になると赤ちゃんの揺籃を、
私の寝台の傍に置いて、それがちょいとでも動くと
目を醒ましましたの。
お乳を飲ませたり、抱っこして寝かしたり、
泣き罷(や)まないときには床から起きて、
ゆさぶりながら部屋の中をあちこち歩いたり、
そうして夜のあけがけにもう洗濯桶の傍に立たなくてはなりませんでした。
それから市場の買物や煮炊きの世話や、
今日も明日もそんな風でございましたの。
ねえ、ですからいつでも気が勇んでいるとは申せませんでしょう。
その代わり食べ物もおいしく、休むのも休み甲斐がありますのね。
(行き過ぐ)。

マルテ

でも可哀そうな女達は困ってしまいますわ----
男やもめを改宗させることは仲々出来ないことですもの。

メフィストーフエレス

それはただ貴女のような人の腕次第というものですよ、
私なんぞにもっといい事を教えるのは。

マルテ

ねえまっすぐにおっしゃいよ、貴君まだだあれも御見附なさらないの？
心がどっかに繋がれているではありません？

メフィストーフエレス

諺に云いますね----自分の寵(かま)と
よい女房は、金や真珠の値打ちある。

マルテ

私はこう云ってきいているんですよ----貴君は一度も気乗りがなさらなかった？

メフィストーフェレス

何処でも随分鄭重にして貰いました。

マルテ

私の言うのはこうなのよ----貴君は心の中で一度も本気にならなかった？

メフィストーフェレス

御婦人方に戯談を云うような失礼な真似をしちゃいけませんとも。

マルテ

ああ、貴君は私のいうことがわからないのね！

メフィストーフェレス

本当に御気の毒様です！

でも私にはわかっていますよ----貴女が大変御親切なことは。
(過ぎ行く)

ファウスト

小さい天使さん、貴女は僕がわかりましたか、
僕が庭へはいったときすぐに？

マルガレーテ

貴君御覧にならなかった？わたし眼を伏せたでしょう。

ファウスト

貴君は、此の間お寺の帰りがけに、
厚かましくも僕がした
あの勝手な真似を堪忍して呉れるでしょうね？

マルガレーテ

わたしびっくりしましたわ、自分にはついぞなかったことですから。
わたし、誰からも悪い評判を立てられるようなことはなかったでしょう。
わたし考えましたの----ああ、あの人はお前の様子に
何か蓮っ葉なみだらなところでも見附けたのだろうか？
あの人は、この浮気女にまっすぐ当たって見てやろうと
すぐ出来心を起こしたようだったね、と。
でもわたし白状しますわ！わたしの此処に
貴君を憎からず思う心がすぐに動き始めたことは、気が付きませんでしたの。
でも私随分自分を憎みましたわ、
貴君をもっと憎んで上げることが出来なかったのですもの。

ファウスト

たまらなく可哀い人！

マルガレーテ

一寸御放しになって！
(雛菊の花を摘み、弁を一枚一枚とむしる)

ファウスト

どうするの？花束かい？

マルガレーテ

いいえ。ただ遊び事ですの！

ファウスト

え？

マルガレーテ

あちらへいらして！御笑いになるわ。
(むしりつつ呟く)。

ファウスト

何をつぶやくの？

マルガレーテ(やや高く)。

思ってる----思わない。

ファウスト

ああやさしい天女の姿！

マルガレーテ(続く)

思う----思わぬ----思う----思わぬ----
(最後の弁をむしりつつ、歓喜に輝きて)。
あの方は私を思ってる！

ファウスト

思ってるとも！この花占(はなうら)を
神々の御告げとお思い、あの人はお前を思っているのだ！
愛されるとはどういうことか、わかるかい？あの人はお前を思っている！
(女の両手を把る)

マルガレーテ

わたし慄(ふる)えるわ！

ファウスト

おお、慄えるんじゃない！この眼の色で、
この手の力でお前に言わせておくれ、
口では言い尽くしようのないことを----
僕はすっかり身を捧げる、
そうして永遠でなければならぬ歓喜(よろこび)を感じている！
永遠だ！----それが終われば絶望の外あるまい。
いや、終わりはない！終わりはない！
(マルガレーテ男の両手を握り締め、さて身を振り放して走り去る。
男一瞬間思案しつつ立ち、やがて女のあとにつき行く)。

マルテ(登場しつつ)

日が暮れるわ。

メフィストーフェレス

そう。じゃ私たちは帰りましょう。

マルテ

もっと此処におとめしたいのですが、
何分大変人気の悪い土地でござんすから。
みんな何もなすこともなく
何もすることもなく
ただ近所の者のすることなすことを見張るだけが能のようなものでしてね。
それで、どんなに気をつけても噂をされるのですよ。
ところであの若い組は？

メフィストーフェレス
あの道をあっちへ飛んで行きました。
浮かれ蝶々どもが！

マルテ
あの方はあの子がお気に入ったようですね。

メフィストーフェレス
そうしてあの子の方でもね。
これが世界の成り行きですよ。

園 亭
(マルガレーテ飛び込み、扉の背後に身を隠し、人差し指を口にあて、
隙間より外を窺う)。

マルガレーテ
入らした！
ファウスト来る。

ファウスト
悪戯っ子だね、こんなにして僕にからかうなんて。
攫(つか)まえたぞ。(女に接吻す)。

マルガレーテ
(男に縋りつき接吻を返しながら)。
ねえあなた！私心(しん)からあんたが好きよ。
メフィストーフェレス扉を敲く。

ファウスト(地団駄踏みつつ)。
誰だ？

メフィストーフェレス
親友です！

ファウスト
畜類奴！

メフィストーフェレス
もう切り上げる時刻です。
マルテ来る。

マルテ
ねえ、本当に遅うござんすよ。

ファウスト

送ってあげちゃいけないの？

マルガレーテ

それこそお母さんがねえ----さようなら！

ファウスト

帰らなくてはならないかなあ？

さようなら！

マルテ

失礼！

マルガレーテ

又じきにね！

(ファウストとメフィストーフエレス退場)。

マルガレーテ

まあ本当に！おおいう男の方になると

何から何までよく御気がつくこと！

あの方の前では、わたしただ含羞(はにか)んで立っていて、

何とおっしゃってもただはいはいというきりだわ。

わたしは可哀そうな、物知らずの子供で、

わたしの何処がお気に入りのやら、わからないわ。(退場)。

森 と 洞

ファウスト一人。

ファウスト

崇高なる精霊。御前は俺に授けてくれた、俺の歎き求めた

一切のものを俺に授けてくれた。お前がその顔を

焰の中で俺に向けたのも徒事(いたずら)ではなかった。

壮麗な自然を俺の王国として授けてくれた。

それを感じ、受容する力もくれた。ただ冷ややかに

目を睜(みは)りつつ音信(おとず)れることを許すだけではなく、

友達の胸の中を覗くように、自然の深い胸の中を

覗き見る幸(さち)を俺に恵んでくれた。

お前は躍動の生ある者を導いて、列をなして

俺の前を通らせ、静かなる木立や虚空や水に住む

俺の兄弟どもを知ること教えてくれた。

そうして狂風(はやち)が森を揺るがしてざわめき、きしめきつつ過ぎ

巨木の檜が倒れざまに隣の枝々を、

隣の木々を、おしひしゃいでこれをしごきおとすとき、

そうして丘陵が鈍く、うつろにその倒るる音に木魂するとき----

そのときお前は俺を安らかな洞窟の中に導き、俺を

俺に見せる。そうして俺のこの胸の

秘密な、深い不思議が正体を現すのだ。

やがて俺の眼の前に清らかな月の光が

なだめ顔にさし上って来ると----

巖間から、露を持つ木立から、漂いのぼる者は、

過ぎた世の(しろがね)の姿どもだ、

それは省察の酷しき呵責の欲を柔らかにする。

ああ、人間には決して全きものが授からぬことを
今にして俺は感ずる。お前はこの歓喜の添え物に、
俺を神々に近く、益々近くする歓喜の添え物に、
俺がもう手放されぬあの連れをくれた。
其奴が、冷酷に、不作法に、俺を俺の前でこきおろして、
お前の贅(たまもの)を、ただ一語の息吹(いぶき)で
無に変えてさえ、俺にはどうにも仕様が無いのだ。
彼奴が俺の胸の中に、あの美しい姿を慕う
理(ことわり)知らぬ火を忙しく煽り立てる。
そこで俺は渴望から楽受(ぎょうじゅ)へよろめき行き、
楽受の中で又渴望を思って身を焦がすのだ。

メフィストーフェレス登場。

メフィストーフェレス

貴君はこの生活も、もう沢山なほど遣ったでしょうな？
そんなに長引かして一体何が面白いんです？
それは一度試みるのは結構ですがね。
併しそれが済んだら又何か新しい事に取り掛からなくっちゃあ！

ファウスト

君にも何か他(ほか)の用があって欲しいねえ、
天気の良い日に僕をいじめに来るよりは。

メフィストーフェレス

何とでも言うさ！僕も君をほったらかして置きたいのですよ。
そんなことは本気になって言う必要が無いのです。
君のような不愛想な、荒っぽい、気狂じみた仲間なんか
無くしたってちっとも惜しくはありません。
一日中用事は手一杯ある！
何が気に入るんだか気に入らないんだか、
旦那の鼻を見てもちっともわからないんだからね。

ファウスト

それが正当(しょうとう)な物言いだろうよ！
僕をうるさがらせて、御礼を言って貰う気にいる。

メフィストーフェレス

君のような、みじめな地上の子が、僕がなくて
どんな暮らしが出来たと思うんです？
空想のくらくらゆらゆらから、
時を過(あやま)たず、とうになおしてあげたのも僕です、
僕がいなかったら、君はとうに
この地球の外に散歩と洒落れていますよ。
どうしたわけで君は洞穴や巖の裂け目の中に
ててっぽっぽのように惰(なま)けもぐりをしているんです？
湿気(しけ)臭い苔や雫の垂れる石から、蟾蜍(ひきがえる)のように
どんな餌を君は啜り込むつもりなんです？
結構な、嬉しい時間潰しですねえ！
君の体にはまだ博士がへばりついてますね。

ファウスト

君にはわかるかい、どんな新しい生活力を

この荒れ野の彷徨(さまよい)が僕に与えてくれるかが？
そうだ、若し君にそれが大凡でものみ込めたなら、
君は悪魔根性を出して、僕の幸福を許しては置くまいね。

メフィストーフェレス

超地上の快樂というやつですね！
夜と露との中に山深く寝て、
大地と天とを好い気持ちに抱いて、
神様気取りに自分を膨れ上がらせて、
予感の張り切りで大地の随を掘り貫(ぬ)いて、
例の六日仕事をすっかり胸の中に感じて、
思い上がった力でえたいの知れぬものを味わって、
時には愛の大歓喜を以てあらゆる物の中に溢れ込んで、
地上の子はすっかり消えてなくなって、
それからその高遠な直感を----
(一種の身振りをなして)
どうするかは申し兼ねるが----こう結ぼうと云うのですからね。

ファウスト

貴様は怪しからん！

メフィストーフェレス

御気に入らんでしょうね。
貴君には上品ぶって怪しからん呼ばわりをする権利がありますよ。
純潔な心臓の捨て兼ねるものでも、
純潔な耳に聞かせてはいけないのですからな。
手短に言って、僕は貴君に許してあげますよ、
時折何ぞにつけて自分を欺く愉快は。
でも長く我慢は出来ますまいね。
もうそろそろ飽きが来ている。
これがもっと続くと、摩(こす)り傷(いた)められて
あばれ出すか、ふさいで氣病みになるかというところですよ。

それはそれでいいとして！君の可哀い娘(こ)はあちらで家に閉じ籠もって、
何もかも狭苦しく物悲しく思っている。
君がどうしても忘れられない、
君が無常にいとしいのですね。
最初は君の気違いじみた恋心が溢れ出した、
雪解けで小川が溢れるような勢いでね。
君はあの子の胸にそれを注ぎ込んだ、
そこで君の小川は又浅くなったのですな。
私なんぞの考えでは、森の真ん中で玉座に据(すわ)っているよりは、
大旦那の身分としては、
あの可哀そうな、玩具のようなねんねえに
惚れてくれた御褒美を遣わされるのが道のようなだ。

あの子には時の経つのがたまらなく長い。
あの子は窓際に立って、古ぼけた町の廊壁の上を
雲が飛び過ぎるのを眺めている。
「わたしが小鳥であったなら！」こんな小唄を、
昼はひねもす夜は夜中まで、あの子は歌っていますぜ。
どうかするとはしゃいでいる、大抵は萎れている、
おうかするとひどく泣き腫らしている、

それから、見たところ又落ちて来て来る、
だが、思っていることはのべつですよ。

ファウスト

蛇奴！蛇奴！

メフィストーフェレス(独語)

それ見ろ！貴様を攫(つかま)えたぞ！

ファウスト

極悪人奴！此処を退け！
あの美しい女の名を言うな！
あれの旨そうな体を欲しがる欲心を
又この半狂乱の心の前に運んで来るな！

メフィストーフェレス

じゃあどうすればいいんです？あの子は君が逃げたと思っていますぜ、
どうして実際君はもう大分逃げ出していますぜ。

ファウスト

俺はあれの傍にいる、仮令(たと)い俺がもっと遠くへ行くにしても、
俺はとてもあれが忘れられん、とてもあれをあきらめられん。
実に俺はもう主の体さえ妬(ねた)ましくなる、
こうしている間も、あれの唇がそれに触れるかと思うと。

メフィストーフェレス

友よ、そうでしょうとも！僕も時々貴君が妬ましいとおもいましたよ
薔薇の間に草を喰(は)む雙児(ふたご)の一組という奴には。

ファウスト

うせあがれ！口入れ屋奴！

メフィストーフェレス

結構だ！貴君は怒鳴るし、僕は笑わずにはいられないし。
小僧と嬢やを拵えた神は
序でに逢瀬も作ってやるのが
最も高尚な仕事だとすぐ悟ったのです。
とにかく行って御遣りよ、とてもみじめですよ！
貴君が行くのは好い子の閨(ねや)です、
死にに行くのではありません。

ファウスト

あれの両腕の中にいる天上の歓喜が何になる？
あれの胸に寄り添うて俺の身を温めようと儘(まま)！
それでも俺はあれの苦勞を察して遣らずにいられようか？
俺は亡命者ではないか？無宿者では？
目的もなく安静をも知らぬ人でなし、
巖から巖へと、妄執に暴れ荒れ狂いつつ
深淵へ轟き落つる滝のような奴ではないか？
そうしてあれはその傍で、子供らしいぼんやりした心持ちで、
アルペンの狭い草地の小舎に住んで、
あれの家庭的な仕事の一切は
小さい世界の中に包み込まれているのだ。

それなのに俺は、神に憎まれた奴は、
巖々を手握(たにぎ)って、
それを粉々に打ち砕いても、
まだ飽き足ることを知らんのだ！
あれを、あれの平和を、埋めずにはいられなかったのだ！
地獄奴、貴様がこの犠牲を是非欲しがったのだ！
悪魔奴、俺のこの煩悶の時間を縮めてくれ！
どうせ来る筈のことなら、すぐに来さしてくれ！
あれの運命が俺の上に崩れ落ちて
あれも俺と一緒に底に沈むが好い。

メフィストフェレス

又何という煮えようです、焼けようです！
はいって行って慰めてやりなさい、馬鹿男奴！
こういう小さい頭は、出口が見つからないと、
すぐに最後を考えたがる。
勇敢に身を持つ奴こそ万歳だ！
一体なら君は随分悪魔が染み込んでいる方だ、
僕なんぞの考えでは、世界中で一等下らないものは、
絶望している悪魔ですね。

グレーチヒェンの部屋

グレーチヒェン紡車に就きて座す、一人。

グレーチヒェン

こころ乱れて、
胸が重い。
乱れはやまず、
ああいつまでも。

君が居らねば
何処(いずこ)も墓場、
広い世界は
この身に苦(にが)い。

憐れな頭(あたま)は
狂ったわ。
憐れな心は
砕けたわ。

こころ乱れて、
胸が重い。
乱れはやまず、
ああいつまでも。

窓に凭(もた)るのは
君見たさゆえ、
門を出るのも
逢いたいばかり。

雄々しい歩み、
気高い姿、
口のほほえみ、

あの眼の力、

湧いて身に沁む
魔法の言葉、
握り締める手、
ああ、あのきっす！

こころ乱れて、
胸が重い。
乱れはやまず、
ああいつまでも。

胸がこがれる、
あなたの方へ。
ああ、縋り付き、
身に引き寄せて、

思いのたけを
口付けしたや、
口付けされて
身が消えるまで！

マルテの庭

マルガレーテ。ファウスト。

マルガレーテ

ハインリッヒさん、私に約束して！

ファウスト

出来ることなら何でも！

マルガレーテ

聴かして頂戴、貴君御宗旨のことはどうなの？
貴君は本当にいい方だけれど、
御宗旨のことは格別に思っていらっしゃらないらしいわね。

ファウスト

その話はおよし、いい子！僕がお前を好いていることはわかるね。
自分の好いている人達のためには、身も命も惜しまないし、
又誰からもその人の感情や教会を奪う気はないのだよ。

マルガレーテ

それじゃいけないのよ。自分で信じなければ駄目なの！

ファウスト

駄目なのかい？

マルガレーテ

ああ！貴君をどうにかしてあげる力が私にあるといいんだけどねえ！
貴君は秘蹟も敬いなさらないでしょう。

ファウスト

敬っている。

マルガレーテ

でも願う気はないのね。
弥撒(みさ)にも告悔にも長らくお出なさないでしょう。
貴君、神様は御信じになって？

ファウスト

ねえ、いい子、誰がそれを言えるだろう、
僕は神を信じる、なんて？
坊さんにでも賢者にでも訊いて見るがいい、
その返事はただ訊き手を
嘲(あざけ)るようにしか聞こえないから。

マルガレーテ

では貴君は御信じにならないの？

ファウスト

ねえ、優しい人、勘違いをしないでおくれ！
誰に彼を名指す権利があらう？
俺は彼を信ずるなんて
告白することが誰に許されるだろう？
又感ずる力のある者で、
俺は彼を信ぜぬ、というような
無謀を敢えてする者があり得ようか？
一切を包む者、
一切を保つ者、
彼はお前をも、俺をも、彼自身をも
包んで保たせて行こうではないか？
天はあの上であんなに円く懸かっているではないか？
地は此处に、下にあって、堅固に広がっているではないか？
親しげな目色をしながら
永遠な星は昇って来るではないか？
俺はお前と眼で眼に見入り合っているではないか、
そうしてお前の頭へ胸へ
あらゆる物が押し迫って来て、
永遠な秘密のうちに、眼に見えず、眼に見えて、
御前の傍に漂い動いているではないか？
その秘密が如何に大きくとも、お前の心臓をそれで満たすが好い、
そうしてお前がすっかりその感じに嵌まって祝福を覚えるとき、
幸福！心臓！愛！神！
何とでも好きなように名前をつけるが好い。
僕にはそれに名づける名が
ない！感じが総てだ。
名前は声だ、煙だ、
天の耀きを立ち罩(こ)める霧だ。

マルガレーテ

それはみんな結構な、いいことですわ。
大抵同じようなことを神父様もおっしゃるわ、
ただ少し言葉がちがっているけれど。

ファウスト

普天の下にあるあらゆる心は、

銘々自分の言葉で、
何処へ行ってもそう言うのだ。
僕が僕の言葉で言っただけ悪い訳もあるまいではないか？

マルガレーテ

それはそう伺うと尤もなようだけれど、
やっぱり間違ったところが残るのよ、
でも貴君は基督教ではないんですもの。

ファウスト

まあおよし！

マルガレーテ

私、貴君を人中で見ると、
とうから気がふさいでならなかったわ。

ファウスト

どうして？

マルガレーテ

貴君と一緒にいらっしゃる人ね、
あの人、私、心から底から嫌いなの。
私、生まれてからこの方、
あの人その他(ひと)を馬鹿にした顔を見るぐらい
胸を刺されるような気がしたことはないわ。

ファウスト

可哀い御人形さん、彼奴を怖がるには及ばないよ。

マルガレーテ

あの人の前にいると、私、血に響くの。
一体私どんな人にだって好意を持つんだけど。
私、貴君にお目にかかりたくて、恋しくてしょうがないときでも、
あの人の前だと何処か怖くてならないの。
それに私、あの人を悪党だと思ってよ！
若しそれが間違いだったら、神様どうぞ御免下さいまし！

ファウスト

ああいう変わり者もいなくてはならないのさ。

マルガレーテ

あんな人とは一緒にいたくない！
戸口からはいつて来るたんびに、
いつも随分人を馬鹿にした顔をして内を覗いて、
そうして少し怒っているような様子なのね。
あの人とはどんな事にも同情を持てないにきまっているわ。
一人をだって愛することが出来ないことは、
ちゃんとあの顔に書いてあるわ。
私、貴君の御腕の中にいると、本当にいい心持ちで、
本当にのびのびして、本当に任せきって温かくなるのだけれど、
あの人がいると胸が締め付けられるようなの。

ファウスト

勘のいい天使だなあ！

マルガレーテ

そのときの私の縮み上がりようと云ったら、
二人でいる所へあの人 came ばかりで、
私はもう貴君を愛しているんじゃないと思うほどのよ。
それに、あの人がいると私いつでもお祈りが出来ないの、
それが私の心の中まで噛んで痛めますわ。
ハインリッヒさん、貴君だってきっとそうでしょう。

ファウスト

お前には性が合わないのだ！

マルガレーテ

私もう帰らなくては。

ファウスト

ああ、ほんの一時間でも
落ちてお前の胸に縋って、
胸に胸、魂に魂を寄せ合うことが出来ないのかなあ？

グレーチヒェン

ああ、私が一人で寝(やす)むのでさえあったら！
私は貴君のために、今夜、喜んで掛け金を外して置くのだけれど。
かあさんはすぐ目を醒ますでしょう---
私達がかあさんに見附かりでもしようもんなら、
私、すぐその場で死んでしまうわ！

ファウスト

天使さん。それはなんでもないことだ。
此処に小さい瓶がある！たった三滴だけ
飲みなさる物の中に入れば、
いい心持ちに、正体なく、熟睡なさるのだ。

マルガレーテ

貴君のためなら、何だっていやというものですか？
どうぞかあさんの毒になりませんように！

ファウスト

可哀い子よ、毒になるようなことを僕がお前にさせるものか。

マルガレーテ

ねえ、私あなたのお顔さえ見ると、
なぜだか、何でも貴君のおっしゃる通りにさせられてしまうのよ。
わたしもう貴君のためにいろんなことをしてしまっ
此の上して上げることは残っていないような気がするわ。(退場)。

メフィストーフェレス

餓鬼奴！行ってしまいましたか？

ファウスト

又探偵したか？

メフィストーフェレス

事も細かにすっかり拝聴しましたよ。
博士先生公教要理を試験されましたね。
願わくは利き目があってほしいものです。
一体、娘という奴は、男が昔流儀に
信心深くて素直だかどうかをひどく穿鑿したがるものでしてね。
其処で頭を下げるなら、此方にも随(したが)うだろうと思うのですな。

ファウスト

君みたいな怪物にはわからないんだ。
この信実な可哀らしい魂が、
自分の信仰をたっぷり持っていて、
その信仰だけが
自分に祝福を与えることを承知していて、それだから、清浄に苦勞をしているわけだよ。
自分の最愛の男が外道に堕ちていては困ると。

メフィストーフェレス

ねえ、超官能的、官能的恋男さん、
娘っ子が君を鼻面掴んで引き廻しますぜ。

ファウスト

糞と火との合いの子の笑われ者奴！

メフィストーフェレス

それにあの子は大家程度に骨相学を心得ていますね。
僕が前にいると、何かしらんが変な気持ちになる、とぬかす。
僕の面(めん)が隠された意味を予言するという訳なんだね。
僕が間違いなしに天才児で、事によったら
悪魔かも知れんということを、あの子は勘づいているんだね。
ところで今夜は----？

ファウスト

君に何の関係がある？

メフィストーフェレス

こっちはこっちでそれが嬉しいのですよ！